

地域社会と連携した体験型環境教育の試み ——環境 NPO との連携を中心に（3）——

藤野裕弘*・内田晴久*・室田憲一*・北野 忠*・藤吉正明*・
小栗和也*・岩本 泰*・藤田成吉*・小澤紀美子*

1. はじめに

人類社会の持続的存続には、環境問題を広い視野から考え、問題の解決に向けて行動できる人材の育成が必要である。その様な人材育成には、人文・社会・自然科学の垣根を越えた学際的で実践的な教育プログラムの構築が極めて重要となる。その中でも実践的な環境教育への期待は大きく、2000年には国連における日本主導の「持続可能な開発のための教育の10年」がスタートした¹⁾。さらに、日本では環境教育を推進し、国民の環境保全意識を高めることを目的とした「環境保全活動・環境教育推進法」が2003年に成立した²⁾。現在、多くの教育現場では、小学校～高校の「総合的な学習の時間」を活用した環境教育や各地域の NPO 法人による環境教育、大学と初等中等教育との連携による環境体験プログラムなど、様々な取り組みがなされてきている。

東海大学では、環境分野における文理融合型の人材育成および研究の向上を図り、その成果を、積極的に地域・社会に還元することを目的の一つとした環境憲章を1997年に発表している³⁾。東海大学教養学部人間環境学科自然環境課程では、自然科学と社会科学を融合させた学際領域として「人間環境領域」を構築している^{4, 5)}。そこでは、理系と文系を融合させた、より学際的・総合的な視野で環境問題を認識し、解決策を考察できるような学外での様々な体験を重視した環境教育が具体化されている^{4, 5)}。大学院人間環境学研究科でも文理融合の実践教育が展開されている^{4, 5)}。この我々の実践的な環境教育プログラムは、2011年度の日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育委員会21期提言の中で引用されるに至っている⁶⁾。

こうした背景のもと、我々は、環境 NPO と連携した体験型環境教育を実施してきた⁷⁻²²⁾。今回は昨年に続き、人間環境学科自然環境課程と人間環境学研究科、湘南里川づくりみんなの会（神奈川県湘南地域県政総合センター他）が連携して、金目川水系流域で実施された「クリーンキャンペーン」に学生を派遣した企画について報告する。

なお、「湘南里川づくり」とは、湘南地域のふるさとの川である金目川水系の豊かな自然や文化、それらと調和したくらしなどを子孫に残すべき貴重な財産として、次世代を担う子どもたちに引き継いでいくため、源流から下流に至る全流域を対象に、市民（湘南里川見守り隊）

提出日2012年9月26日 受理日2012年11月28日

*教養学部人間環境学科自然環境課程

と行政の協働により清掃、植栽、生き物観察会など河川の保全・活用を通じて、みんなに愛され親しまれる川づくり（里川づくり）を推進する活動のことである²¹⁻²³⁾。

2. 実施概要

2011年5月23日から正式に「湘南里川づくりみんなの会」が活動を開始し、これまで試行的に行ってきた活動を継続実施している。流域で活動する民間や地方自治体関連の団体が清掃活動を集中して行う期間を「クリーンキャンペーン」として参加呼びかけにもこれまで通り協力している。その各団体の活動や市の企画に学生が参加し、その内容と各団体の通常の活動をレポートさせることが授業のおもな構成となっている。学生が参加した団体と企画は、以下の表の通りである。

クリーンキャンペーンにおいて学生が参加した団体及び企画一覧

地域	団体名	実施日
平塚市	河内川あじさいの会（河内川）	6/25（土）
	金目川をきれいにする会（金目川）	7/26（火）
	座禅川をキレイにする会（座禅川）	7/17（日）
秦野市	鶴巻あじさい散歩道美化の会（善波川）	6/18（土）
	秦野市河川浄化月間「金目川環境ウォーク」(金目川)	7/23（日）
	鶴巻ホタルの会（善波川）	7/17（日）
	秦野市河川浄化月間「葛葉川美化清掃」(葛葉川)	7/3（日）

3. 結果と今後の展望

湘南里川づくりにおいて、流域で活動する NPO 法人や市民団体の交流は非常に重要である。従って、各団体の活動内容をポスターにまとめ、ポスター展示会を実施することは、各団体の相互理解に有効であった。さらに、これらの団体の情報交換やネットワーク構築のために企画された「湘南里川づくりフォーラム」でもポスター展示を行うことで、各団体の交流を効果的に進めることができた。学生は、クリーンキャンペーン参加の成果をポスターにまとめて展示会で発表した。その成果をまとめたポスターは、一部を改変して図1～7に示した。

学生は、クリーンキャンペーンへの参加内容をポスターに加え、報告書としてもまとめた。これらの課題作成は、卒業研究の内容にも反映されており、学生の視野を広げるうえで、有効であったと考えられる。また、このような活動に学生や院生が、企画段階から参加することは、「学外での様々な体験を重視した環境教育」を積極的に展開している自然環境課程や人間環境学研究科にとって、効果的な実習の機会を得ていることになる。

以上のことから、参加する団体との連絡体系や天候不順時の対応など課題は残るものの、このような実践教育は、今後も継続することが重要である。加えて、伊勢原市を拠点として活動する団体へ学生を参加させることも検討課題である。

成果の公表

本研究は、「地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境 NPO との連携を中心に (1) ～」²¹⁾ の成果を背景に実施しており、その成果の一部は、「地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境 NPO との連携を中心に (2) ～」²²⁾ に反映されている。また、成果をまとめた以下のポスター展示会を実施し、湘南里川づくりみんなの会のホームページにも掲載した。

① SOHUM「湘南里川づくり地域共生プロジェクト」ポスター展示会

展示期間：2011年12月12日（月）～16日（金）、展示時間：9時00分～17時00分

展示場所：東海大学湘南キャンパス（10号館 S - PLAZA）

② 「湘南里川づくりみんなの会」ホームページに掲載

〈http://www.satokawa.com/koremade/koremade_201106.html〉

謝辞

この教育研究の一部は、2011年度の教育研究補助金により実施された。関係各位並びに参加学生に、感謝申し上げます。

引用文献

- 1) ESD - J 特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議
<http://www.esd-j.org/>
- 2) 環境省総合環境政策局環境教育推進室、環境教育・環境学習、環境保全活動
<http://www.env.go.jp/policy/edu/>
- 3) 東海大学環境憲章 <http://www.u-tokai.ac.jp/ems/kankyokensyo.htm>
- 4) 藤野裕弘・内田晴久・松澤宏・小林一夫：「企業のCSR活動と連携した実践系授業の展開（1）－CSRと大学院授業との連携－」．2010年度日本環境教育学会第21回大会研究発表要旨集，pp. 156（2010）．
- 5) 藤野裕弘：「地域社会と連携した体験型環境教育の試み～東海大学の実践例～」．私立大学環境保全協議会会誌．第15号．19-24（2012）．
- 6) 日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育委員会21期提言：「高等教育における環境教育の充実に向けて」．2011年9月22日．
- 7) 室田憲一・藤野裕弘 他：NPOと連携した体験学習型教育の試み．2003年度日本環境学会第29回研究発表会講演要旨集．pp.178-180（2003）．
- 8) 室田憲一・藤野裕弘 他：NPOと連携した体験学習型教育の試み．東海大学紀要教養学部．第34輯．331-333（2003）．
- 9) NPO法人自然塾丹沢ドン会編集：名古屋の自然－丹沢の雑木林・棚田の復権と生き物たち，夢工房，神奈川．pp.63（2003）．
- 10) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境NPOと連携した体験学習型環境教育の試み（1）．2004年度日本環境学会第30回研究発表会講演要旨集．pp.84-85（2004）．
- 11) 室田憲一・藤野裕弘 他：環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み（1）．東海大学紀要教養学部．第35輯．271-276（2004）．

- 12) 室田憲一・藤野裕弘 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（2）. 2005 年度日本環境学会第 31 回研究発表会講演要旨集. pp.240-243 (2005).
- 13) 室田憲一・藤吉正明 他：環境 NPO と連携した体験学習型教育の試み－農業体験事例報告－. 東海大学紀要教養学部. 第 36 輯. 1-11 (2005).
- 14) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（2）. 東海大学紀要教養学部. 第 36 輯. 249-255 (2005).
- 15) 藤野裕弘・藤吉正明 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（3）. 東海大学紀要教養学部. 第 37 輯. 247-252 (2006).
- 16) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（1）－乗船体験実習－. 2007 年度日本環境教育学会第 18 回大会研究発表要旨集. pp.65 (2007).
- 17) 室田憲一・藤吉正明 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（2）－農業体験実習－. 2007 年度日本環境教育学会第 18 回大会研究発表要旨集. pp.66 (2007).
- 18) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（4）. 東海大学紀要教養学部. 第 38 輯. 271-278 (2007).
- 19) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（5）. 東海大学紀要教養学部. 第 39 輯. 289-294 (2008).
- 20) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境 NPO と連携した体験実習型環境教育の試み（6）. 東海大学紀要教養学部. 第 40 輯. 365-370 (2009).
- 21) 藤野裕弘・内田晴久他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境 NPO との連携を中心に（1）～, 東海大学紀要教養学部, 第 41 輯, 315-328 (2010).
- 22) 藤野裕弘・内田晴久他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境 NPO との連携を中心に（2）～, 東海大学紀要教養学部, 第 42 輯, 305-312 (2011).
- 23) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（2）～. 東海大学紀要教養学部. 第 42 輯. 297-304 (2011).

図 1. 鶴巻あじさい散歩道美化の会の活動に参加して

会の目的など

かつて善波川の土手は、雑草が生い茂り不法投棄で汚れのひどい所でした。そこで、川の清掃から始め、さらに、親しまれる環境をめざし、1995年からあじさいの植樹とその管理をしています。また、ベンチや案内板の設置など、人々が集まり、憩う場所づくりを行っています。

例年6月の第3日曜日にはあじさい観賞会を開催し、花の終了時には、地元の小学生と一緒に花摘みを行うなど、地域と連携した取り組みを行っています。



私たちが参加した活動内容

あじさい散歩道周辺の草刈りと善波川のゴミ拾いをしました。会のみなさんは草刈りを、私たちは、日頃から水質実験をしているということから、善波川に入り、散歩道沿いのゴミ拾いをしました。この日はあいにくの雨で、1時間程度の作業でしたが、さまざまなゴミを拾うことが出来ました。また、会の皆さんと楽しくお話をしながら参加させて頂きました。

シャワー発見！



あじさい散歩道



善波川のゴミ拾いの様子



シャワー発見の様子

感想

今回、鶴巻あじさい散歩道美化の会に参加し実際に善波川に入って清掃してみると、川底には浴室で使用するシャワーや空きビン・缶、植木鉢等、さまざまな物が捨ててあることに気づきました。それらは誤って川に落ちてしまった物とは思えず、明らかに人為的に捨てられたとみられる物ばかりでした。考え難い現実を突きつけられて、とても驚きました。このような現状を解決していくためには、更なる活動の拡大が必要になると考えられます。そのためには、地域と行政の連携のもと、地域住民にもっとこの団体と活動を知ってもらわなければならないと思います。

7月には善波川の魚に視点を置いた自然環境教育研究会を小学生対象に開くなど、実際に自然に触れてもらいイベントを行うことで、幅広い年齢層の方々に活動を知ってもらい良い機会になったと考えられます。

また、私たちの様な若い人たちがもっと積極的にボランティア活動に参加していくことで、地域共生社会の実現に大きく貢献することが出来るでしょう。今後も善波川の美しい自然を守る為、活動を続けていってほしいと思いました。

図2. 秦野市河川浄化月間「金目川環境ウォーク」に参加して

金目川環境ウォークとは

金目川環境ウォークは、秦野市が毎年7月に定めている秦野市河川浄化月間に行われる活動の一つであり、今回で15回目になります。この活動はゴミを拾うことで川をきれいにすること、川の様子や現状を地域の方々に伝え、知ってもらうことを目的に行われるものです。

活動内容（2011年7月23日実施）

当日、約40人が参加し、金目川上流にある東公民館の近くの金目川橋から下流へ約300メートルの区間において、ゴミ拾いと水質調査を行いました。ゴミ拾いでは、可燃用と不燃用の袋を用い、川岸に落ちているゴミを拾いました。また、流れが緩やかなところでは川の中に入り、空き缶などを拾い、計約40kgのゴミを拾いました。また、水質調査では、子どもを中心にして、川の水質をパックテストという簡単な水質分析法を用いて調査しました。その結果、ホタルがすめる程度のきれいな水質だということがわかりました。



集合場所（東公民館）



河川内でのゴミ拾いの様子



水質調査の様子



活動場所（金目川橋から下流方面）

今回参加し、捨てられているゴミの少なさに驚きました。年々川に捨てられているゴミは減っており、この活動の意義と継続して活動することの大切さを実感しました。また、川に入っただけの作業もあるため、地域の方、特に子どもにとって川の様子を知ってもらい、川に親しむよい機会であると思いました。小学校にチラシを配ってもらうなど、広報活動をさらに充実させ、子どもから年配者、親子での参加など、地域のより多い方々の参加によって、よりよい活動になるのではないかと思います。

図 3. 河内川あじさいの会の活動に参加して

～河内川あじさいの会～

河内川は以前、ゴミが多くドブ川と化し、悪臭を放って人が寄り付かない場所となっていたが、子供たちが川に入って水遊びができるような川にしたいとの思いのもと、平成 4 年頃よりあじさいの管理や河内川の清掃などを行っている。

川の中の砂利の入れ替えや、土手のあじさいの植栽を行うなどの活動の結果、現在では鎌倉橋から下河原橋までの約 1.4 km の両岸にたくさんのあじさいが咲き誇っている。

河内川あじさいの会～活動と概要～

～活動～

- ・土手や川の清掃
(大体月に 1 回のペース、あじさい祭りの前は毎週行っている)
- ・あじさい祭りの参加・運営
- ・川岸のあじさい管理
(草刈り・植栽・ごみ拾いなど)
- ・小学生対象の生き物観察会 (10 月)

～概要～

- ・平成 10 年、平塚市美化推進団体より発足。
(当時の活動は砂利の入れ替えやあじさいの移植など。当時の名称は『河内川あじさいを愛する会』)
- ・活動メンバーは平均して約 30 人程度
(平日などは別の仕事をしている人が多い)
- ・あじさい祭りは今年で 7 回目！

あじさい祭りについて

毎年 6 月に行われる地域活性化を目的としたイベント。

あじさいの会を中心に地域一体となって行われており、日ごろの努力の成果である満開のあじさいに彩られながら子供から大人まで幅広い年齢層からの支持を得ている。

模擬店なども数多く出店しており、ほかに万田太鼓やパネル展示などのイベントも充実している。



活動の様子～美しいあじさいを守る為に～



活動開始前！



川に入って掃除！



あじさい祭り前日！



活動に参加して～考察～

実際に活動すると、道路から見ていたよりも川岸や川底にたくさんのゴミが落ちていることに気がついた。一方で川の中には魚の姿が見られ、メンバーの方からは“昔に比べたらかなりきれいになった”との声も聞くことが出来た。平塚市だけでなく他の自治体においても、あじさい祭りのようなイベントを行う事によって、地域と行政の環境に対する配慮に触れることができ、結果地域住民も環境に配慮する意識を持てるようになるのではないかとと思われる。

また、今では生物が住みつくほどきれいになった川で生き物観察会を行うなど、子供を対象とした行事を開く事で、幅広い年齢層の地域住民に活動を知ってもらう事ができ、将来的な地域共生社会の実現に大いに貢献していると言えるだろう。

図4. 金目川をきれいにする会の活動に参加して

～金目川をきれいにする会～

金目川は以前、夏になると雑草が身の丈以上になってしまい、土手と川の境界が分からず大変危険な状態になっていました。地域住民からも「暗くて怖い、草で川と道の境目がわからず危ない」などの声が出たため、金目川をきれいにする会としての活動を開始しました。

今では金目川をきれいにする会の活動の成果により金目川は明るく、美しい景観を保っています。現在では子供たちに実際に川に触れ、体験を通して学んでもらう事を目的とした生き物観察会の実施など、様々な活動を行っています。

活動内容

主な活動内容は川岸に茂ったアレチウリ、オオバタクサなどの刈り取りをします。大まかなところは草刈り機を用い、細かなところは草刈り鎌を用いて草刈りを行いました。私たち学生参加者は草刈り鎌を用いた作業や、農道に出た邪魔な草の撤去を主に行いました。

活動範囲は土屋橋下流約800m地点から下流に向かって1km程度の右岸で、左岸の清掃、管理は別の活動団体が行っています。



～活動～

川岸・土手の清掃、ゴミ拾い
雑草—主に特定外来種の刈り取り
(オオバタクサ、アレチウリなど)
右岸の日本固有種の植物の保護
(ヨモギ、オドリコソウ、イタドリなど)
小学生対象の生き物観察会

～概要～

10年前地域住民の声により発足
活動メンバーは平均して30人程度。
(発足当初は70人程度であった。)
活動時期は草の伸びる5月、7月、9月の
年に3回
今年は8月に小学生を対象とした生き物
観察会を実施

活動前



活動中



活動後



考察

参加者の減少はほかの団体でもみられ、自然消滅してしまうことがあります。金目川をきれいにする会での参加人数の減少の原因としてあげられるのは、参加者の高齢化です。そのため、このような活動を地域住民に知ってもらい、持続的に参加してもらえるようなことを行えばよいと考えられます。たとえば、金目川をきれいにする会に参加してもらい、そのあとに生き物観察会を開くなどのことを行えばさらに活動をいろいろな人に知ってもらう機会になると考えられます。

まとめ

作業をしていると日本の固有種であるヨモギ、イタドリなどが生えていました。活動後は草がなくなったため風通しが良くなり、会長の方から、若い人がいると作業がはかどるとの言葉をいただきました。地域団体や地域住民、行政がうまく連携していく事でこうした活動を行っていることが地域住民に伝わり、地域全体に活気があふれ、湘南里川づくりが広がっていくと思います。



図5. 座禅川をキレイにする会の活動に参加して



座禅川をキレイにする会とは？

「座禅川をキレイにする会」は7年前に発足し子どもたちが遊べる川に戻ろう、かつての座禅川の自然を復活させるために活動を行っている団体です。定期的な草刈りをはじめとした川の管理を行うことで座禅川の自然が回復するのを促しています。

座禅川の変遷と会の活動

座禅川は農地が多い地域を流れており、兩岸を堤防に囲まれています。かつてはアユやウナギが獲れ、ホタルも見られる川だったものの、堤防が出来たことや下水道の整備が遅れていたこと等からは水質が悪化していました。また兩岸は竹林に覆われ川を挟んで向かいあう住民の家がお互いから見えなかった状態だったそうです。現在では座禅川をキレイにする会の活動により竹林は無くなくなり、定期的な草刈りが行われることや下水道の整備が進んだことで川の水質は大きく改善されているそうです。近年では土の堆積が進みカワアナゴが生息するようになり、それを餌とするホタルが再び川に生息するようになりました。

7/11 座禅川堤防夏の草刈りと清掃の様子

夏の暑い日差しの中約70人の人々が座禅川に集まり、草刈り機30台を中心に、その傍らを細かく場所を回る鎌と鋏、刈った草を集める熊手を wield 座禅川の堤防周辺の草刈り及び清掃活動を行いました。刈り草は農家の方が使う堆肥になりました。



(上の写真は左からそれぞれ作業前、作業中、作業後の基打橋周辺の様子)

考察・意見

会員の方の話を聞いて今の座禅川からはとても兩岸が竹林に覆われていたころの姿や汚れた水は想像できず、川の中には魚が泳ぎ、堤防に虫やカエルがたくさん生息していてそれを狙って野鳥が集まる豊かな農地とそこを流れる川という風景から、座禅川の水質が大きく回復しているという印象を受けました。参加していた人たちの表情も曇りに負けぬ明るさで、みんなで集まって川の水質を改善させていくことで、人の心にも良い影響をもたらしていると感じました。これからは地域の自治体や学校と連携をとり、子どもたちにこの活動に触れてもらうことが出来れば、より地域全体の活性化に繋がっていくと思います。

図6. 鶴巻ホテルの会の活動に参加して

活動内容

鶴巻ホテルの会は、再び善波川にホテル呼び戻すため、ホテルにとって住みやすい環境作りを目的として活動しています。また、ホテルの住みやすい環境を整えるために周辺地域のゴミ拾い、草刈り稲作なども4年前から行っています。地域の方たちとの触れ合いを大切にしながら活動している団体です。



今年の草刈りの様子



去年の田植えの様子

まとめ

私は今までボランティアに参加した事がなく、今回の「湘南里川づくり」のクリーンキャンペーンが初めてのボランティアへの参加でした。参加してみると見るもの触れる物のほとんどが初めての物ばかりでした。そして何より地元の方たちが本当に地元を大切に思っている事がわかりました。私は今回の活動で、こんなにも身近に地元を大切にしている団体がある事をもっと沢山の方達に知ってもらいたいと思いました。その為には、もっと多くのチラシの配布や呼びかけをするべきではないかと思います。

今回の活動

今回私たちは4人で田んぼの草刈りに参加させて頂きました。午前にひかりのまちコミュニティセンターに集合し、そこから車数台で現場に向かいました。慣れない作業に戸惑っている私たちに、鎌の持ち方を始め、草の刈り方などを親切に教えて下さいました。この日はとても暑く、小まめに休憩をしたり作業しながらも冗談で私たちを笑わせてくれるなど、作業は大変ながらも、とても楽しい時間を過ごさせて頂きました。



参加者の皆さんとの集合写真

図 7. 秦野市河川浄化月間「葛葉川美化清掃」に参加して

秦野市河川浄化月間とは

秦野市では、うるおいとやすらぎの場として親しめる河川環境づくりをめざし、毎年7月を河川浄化月間と定め、河川美化の推進を図るとともに、川・谷戸の動植物などを知ることにより河川の浄化に対する意識高揚を図るための各種行事を開催している。このうち「葛葉川美化清掃」は約4.5 kmにわたり市内の3地区で一斉に清掃活動が行われ今年は840人が参加した。

○開催年月日：平成23（2011）年7月3日（日）

○全体活動（清掃）区間：葛葉川秦野市内新九沢橋から向山橋まで約4.5 km

- (1) 本町地区 （新九沢橋下～くずは台南公園）
- (2) 東地区 （葛葉大橋下～くずは台南公園）
- (3) 北地区 （菩提原会館～中村橋） （菩提原会館～向山橋）

「葛葉川美化清掃」の活動内容

ジャスコ秦野店から少し北へ進み、「新九沢橋」を渡って左に進むと空き地がある。

そこが今回の第24回秦野市河川浄化月間「葛葉川美化清掃」事業の本町地区集合場所となった。清掃範囲は集合地点から葛葉川を上流へ歩き、くずは台南公園までだった。清掃方法は各自「燃えるゴミ」と「燃えないゴミ」の袋を1枚ずつ配布され行われた。ゴミは手で拾い集めていき、1時間半程度で目的地に到着することができた。集めたゴミは分別しておき、その後清掃業者へと引き渡した。



清掃風景



全員で集めたゴミ

活動結果

清掃活動をした結果、「燃えるゴミ」・「燃えないゴミ」共に大量のゴミが取れた。ゴミは至る所に落ちており、特に石の下や草陰に多く見られた。しかしそれほど多い印象は受けず、間隔をあけて所々にゴミが落ちていた。粗大ゴミも少しあり、自転車や鉄板などが落ちていました。大きいゴミは皆で協力して運んでいて、助け合いながら清掃活動をしていました。ゴミの量は集めてみると大量に見えたが、清掃活動を始めた当初は現在の三倍以上のゴミがあり、高さも大人位あったといいます。それに比べたら今年のゴミの量は少なく、むしろ今まで一番少なかったかもしれないとも言われました。

まとめ

清掃に参加する人数が毎年増加し、回収するゴミの量は毎年減少しているのはとても良い傾向だと思った。しかし木々に囲まれた河川に比べ、住宅に囲まれた河川はゴミが多かった。対策としては、高い金網などを設けゴミの侵入を防ぐのが良いと思った。そもそも、何故ゴミを捨ててはいけないのだろうか。それは、捨てたゴミにより環境汚染や悪臭が発生するなどの原因になり、また河川もその影響を受けてしまうからである。地域団体もゴミを捨てさせないように看板などを河川の近くに立て掛けているが、それでもゴミを捨てる人はいなくなる。これは子供の頃からの慣れや環境によるものが大きいので幼少期からの環境への取り組みが重要である。そのためにはボランティアなどがよいが、ボランティアには私たちのような学生があまり見られず、大人やお年寄りの参加が目立った。もっと学生に興味をもってもらうためには、チラシ等の宣伝活動を学校で行い、ボランティアの存在を知ってもらう必要があると思った。また、学校行事に取り入れるなどして、沢山の学生に意識してもらうのも良いと思った。